

脳梗塞の息子（三）退院後の生活

中村 アキヤ

1月8日

今日は待ちに待った退院の日だ。本人でもないのにウキウキする。

病院では哲也はいつでも出かけられる支度をしてベッドに座って待っていた。四時に病院の事務所に行く約二十名の初台のスタッフ全員が集まり学校の終了式のように哲也に表彰状を読んでくれた。「よく頑張った。これからも長期のリハビリに頑張つて欲しい」という主旨だった。

有難くて感激のあまり父親としての挨拶の際声がうわずってしまった。本当にお世話になりました。これからもよろしくお願いします。

帰宅後、都のケアマネージャー、ヘルパー氏がきて今後の退院後のケアに関する契約書にサインした。

夕食時に哲也も加えて家族で退院を祝って乾杯した。嬉しい！

1月20日

朝二階にあがった哲也がカーペットに足をとられて転倒した。腕にアザができ、それ以降肩と腕を痛がっている。日課として決めた散歩を約四十分する。途中歩きながら「どうも」といえるように発音をしつこく教えた。この言葉は短い上にどの場所でも使える。何回も繰り返して少しずつ発音できるようになるが、間を置くと直ぐに忘れてしまう。失語症とはこんなものか、一旦損傷した脳が十分に回復していかないのだ。教えるほうも忍耐が必要。

懸案の自宅での入浴はなんとかこなせた。

1月22日

退院後初めて初台病院にゆく。自宅から片道約一時間を要した。リハビリに二時間、帰途に一時間。哲也疲れたらしく早めに寝る。

これから週に二回の付き添いが父親の日課だ。

1月24日

私は戸山障害者センターでの講習会を見学した。おなじような苦労の家庭

が多いことがわかる。NPO「和音」活動に触れ、その活動状況を理解した。

1月26～29日

毎日二時間ほど歩行練習。転びはしないかとハラハラしながらの付き添いは本当にくたびれる。

1月30日

歩行練習のため家から二十分ほど歩いて戸山図書館まで一緒にいった。帰りに近所に住む落語家の三遊亭金馬師匠夫妻に出会う。金馬さんの奥さんも二回目の脑梗塞で初台に入院していたのだ。奥さんが「哲也さん、同期生だね、がんばろうね」といつてくれた。

2月11日

哲也退院以来三週間を経過した。お互いにペースが判りなんとか暮らしてきた。

血圧も安定している。歩いて十分ほどの澤田内科にも行って薬を貰ったり、トイレも自分ででき、見守りだけで自分で入浴できるようになった。

二階への階段もゆっくり登って昔の自室の書類を捜せるようになった。毎日の散歩も次第に距離が伸びて歩き方も安定してきた。

言葉はゆっくりと単語が増えてきたが、話が複雑になると聞き手は理解できない。「新宿」とか「宝くじ」などの単語は漢字を書いてくれたので理解できた。

2月12日

本人の希望でカラオケを購入した。マイクに七百曲が内蔵されている優れものである。哲也は夜遅くまで訳のわからない言葉で歌っていた。もっと早く買えばよかった。

2月13日

朝、言葉の練習中に母親が「さつきは言えたのに（今度はいえない）」となじったら、哲也が急に泣き出した。「一生懸命やっているのに出来ないんだよ」というようなことを言ったと思う。

私が「泣くな、君も悲しいだろうがお父さんもお母さんももっと悲しいんだよ」といったら、泣きながら「済みません」というように深くお辞儀をした。

午前中は一家で話をせず暗い雰囲気ですごした。

2月14日

比較的暖かったので、発症時入院していた国立国際医療センターまで足を伸ばした。日曜日なので病院は閑散としていた。病室まではいかず一階のロビーでコーヒーを飲んで帰ってきた。バンクーバーオリンピックは今日からだ。

2月15日

哲也は一日中カラオケやら、インターネットをやっている。家から初台病院までの交通機関の乗り換え手順を漢字で書いている。每晚少しずつ酒を飲んでいる。(サケの発音はまだ不十分だが)

哲也の状況が安定するにつれ、両親の疲れが顕在化してきた。私も風邪がなかなか治らない。

2月18日

退院後一ヶ月。初台病院で診療待ちの時間を利用して、二人で入院中お世話になった五階の病棟に行ってみた。エレベーターを降りると菅原さんが見つめてくれて声をかけてきた。二瓶さんはじめ他のスタッフとも再会できた。ここまで回復したことを謝して二階の外来待合室に戻った。

2月25日

哲也の意向で国際医療センターのリハビリ科に行ってみた。平原、関谷、五十谷先生が未だ覚えていてくれて、哲也に「痩せたねー」と声を掛けてくれた。

退院の前日の時間外に六階の病室まできてくれ、最後の訓練と病棟一周を付合ってくれた黒柳さんにも厚くお礼を言った。本当にお世話になりました。

次回訪問時にはチョコレートくらいの手土産を用意しよう。

2月28日

二人で散歩中に哲也が転んだ。何の傷害もなかったが、歩道の盲人用の黄色いベルトのギザギザにつま先が引っかかったらしい。倒れた側に小生がいたので道路に直接転がらず怪我はなかった。よそ見をしていた私の失策である。

3月2日

初台でのリハビリ後、二人で病院のレストランでカレーを食べ、コーヒーを飲んで帰った。段々人間らしい生活になってきた。

3月10日

倅子小母に連れられて赤羽の高木先生のコスモス針灸院にいった。北京大学で学んだという、小柄な女の先生だ。この高木先生との出会いが哲也回復のひとつの転機になった。

正直なところそれまでは鍼灸などは馬鹿にしていたが、その後の哲也の回復を目の当たりにするにつれ、尊敬の念すら覚えたのは確かである

先生は哲也の状態は非常にいいといわれた。頭に針を数本刺して四十分間寝かせ、また頭と顔の発声のツボに針を刺して、哲也に歌を歌わせると針のお蔭で声が響くようになった。

3月13日

高木先生の談によれば哲也は非常に運がいいそうだ。発症後一時間以内に緊急入院できたこと。入院先が国際医療センターだったこと。三カ月後すぐに初台のリハビリ病院に入れたこと。これら日本の最高レベルの施設のお陰で血圧のコントロールが完璧に出来ているので針治療もやりやすいとのこと。

また「四十五歳での発症でよかった。もつと年をとってから発症すると回復が遅いし、社会復帰もそれだけ困難になる。親も年をとるから介護が難しくなる。だから運がよいのだと」。先生の前向きな考え方に感心した。

3月14日

哲也がインターネットで「運転室展望」というDVDを買って見ている。画面は、JRの運転室に乗って自ら運転している気分。「次は新宿」と運転手の声に合わせて駅の名前を無意識に口ずさんでいる。渋谷の発声を口移しに教えた、これまでは発音できなかった「ヤ」が発音できた。ついでに哲也、晃也、晋也も発音できた。うれしくて妻を部屋につれてきてもう一度言わせた。

夕方TBSのTVで慈恵医大病院リハビリ科の安保雅博先生が磁気を脳に当てて、脳梗塞の患者の手を動かす実験例や失語症の治療への応用を実験してみた。ポイントは健康なほうの脳的作用を抑えると壊れた脳の再生が却って早まると言うのだ。テレビの画面では十年も硬縮したままの患者の腕が動いている。哲也の場合は若いし発症してからまだ七ヶ月だ。なんとかなるのでは。

3月15日

午後阿佐ヶ谷のスナック「門」のママ佐々木志津子さんがお見舞いに見えた。去年の八月七日の発症時に病院まで連れていただいた恩人である。

佐々木さんによると、当日、ハーパーを三杯飲み、次いで焼酎を飲みかけたところで急に立ち上がって帰ろうとした。右手が変なので帰るといふ。お代八千円を支払うのに右手はもう利かなかった。

タクシーを呼ぼうと顔を見ると右の唇からよだれが出ている。マスターが救急車を呼んでくれた。救急車が来る間に家に電話したが、本人は喋れないのでママが連絡してくれた。救急車は五分で来たがそのとき哲也は既に立てなかったと言ふ。

当初受け入れる病院が決まらなかったが、十分後に国立国際医療センターに決まった。その頃哲也は躰をかき出し、救急車はサイレンを鳴らしてすぐに病院に着いた。「アミチャン（女の子）が心配してたわよ」とママが言った。

3月18日

発音練習に「運転室展望」というDVDは極めて有効である。山手線、中央線、南北線、南新宿ラインなどの運転席の画面に合わせて各駅毎に放送、表示があり哲也は各駅の名前をDVDに合わせて復誦している。

家族が積極的に発音してお手本を示すと素直にしたがっている。だいぶ駅名を言えるようになった。頑張つて欲しい。退院後二ヶ月経過。

3月19日

初台の診療医の桜井先生に「お名前を言ってください」といわれて哲也はたどたどしく「ナカムリヤテチュヤ」と答えた。ちゃんと答えられた！ やや不明瞭だったが、私はそれを聴いて嬉しかった。本当に嬉しくて頭を撫でてやりたいくらいだった。本人も先生に褒められて以後「列車」DVDの駅名復誦に力が入っている。

3月20日

コスモス高木先生の診療。哲也の悪い方の右足のひざ上内側に針を刺したところ内股から足先まで痛みが走ったそうだ。

哲也は「痛い痛い」と声を上げた。先生は「これはよい兆候でこれを待つて

いた」とのこと。

3月23日

二人で初台病院のカフェテリアで食事をしていると「中村さん」と通りがかりのスタッフが声をかけてくれる。哲也も「やー」と答えている。応答ができるようになり哲也もご機嫌だ。

3月27日

初台と赤羽にこのあと今月中に回数を「一回、二回」と哲也が発音した。

高木先生が針治療中に哲也の知っている歌を歌えという。「岬めぐり」、「六甲おろし」、「なだそうそう」を何回も歌う。次回までもう三曲、サイモン&ガーファンクルなどの歌詞を用意しろといわれた。

4月3日

新宿駅までタクシー、埼京線で赤羽までというルートができ、小一時間でコスモス針灸院にゆけるようになった。各駅のエレベーターやエスカレーターの位置も把握し、哲也はドンドンゆける。帰りがけに赤羽のすし屋に寄ってビール少々と寿司をつまんだ。

この日、哲也が家の二階の自分の部屋に入り、探し物をしていたら、カバンのポケットの中から発症した際に無くしたと思った携帯電話が出てきた。

4月6日

初台病院の帰りにオペラシテイのラーメン屋でビールを二人で一本飲んだ。

新宿駅の階段で哲也は転んだ。なんでもない所だが、飲むとバランスが悪くなるらしい。怪我はなかったけれど、飲ませたことを反省した。

4月7日

高木針灸院での歌のレパートリーが増えた。サイモン&ガーファンクルの「ボクサー」、「ミセスロビンソン」、それに「ポニョ」、「広瀬川恋唄」など、治療中に哲也は大声で歌う。左手をギターのコードをおさえるように動かして。

歌は発声練習にいいそうで、高木先生がこんな曲を全て知っていたとは驚きだ。哲也は「阪神タイガース」とはつきり発音できるようになった。

その夜、風呂で液体石鹸を身体中に塗って洗っている最中哲也はバランスを

崩して椅子ごと横倒しになった。助け起こそうとしたが石鹸を塗った身体が滑って起こすことができない。椅子をどけて哲也は自力で起き上がった。思いがけないことが起こるものだ。そんな時は身体をタオルで包むようにすると滑らないようだ。

4月9日

区役所から手紙が来て介護の認定が2級から1級にあがった。

補助額は減るが、回復したのだから嬉しい。

哲也は相変わらず鉄道のDVDで駅名を声にだして練習している。寝る時間は「十時」、犬が「いっちゃった」、キップの「回数券」などと言えるようになった。

4月24日

哲也は「カード」「焼酎」「東京都新宿区」「ご馳走様」などが言えるようになった。歯の健康に注意するようにと高木先生。

初台病院にいつまで面倒を見てもらえるか聞いた。三ヶ月ごとに会議があつて病状の改善効果をチェックし、効果が薄い場合（飽和した場合）には自宅療養を勧めることにしているとのこと。

若い人の場合は本人も意欲があるのでリハビリの効果が出る。個人差があるので一概に一定期間が経ったらリハビリ中止とはならない由。

当方としては本人も頑張るのでできるだけ長くリハビリをさせて貰いたい旨のお願いをした。

4月27日

初台病院の水田介護士が発声の参考に字の下に種々の口をした顔の絵をつけてくれた。「ア」の場合は口をまん丸にする。「イ」の時は歯を食いしばる顔、「オ」は口をとがらせる、といった具合。哲也も要領がわかったようので発音が一段とよくなった。

叔父の原田夫妻が見えたときに名前を正しく言ってみせご満悦だった。あまりに嬉しかったので、食後に酒を飲むことになった。哲也は焼酎を飲みすぎバランスを失って立ち上がる時床に倒れてしまった。

ビックリしたが身体には傷がなく翌朝もケロッとしていたが、余り自由にアルコールを飲ますのは考え物である。

4月29日

初めて哲也一人を留守番にして夫婦でN響に行くことができた。留守中、彼はJRの駅名を漢字で書きローマ字の読みをつけていた。子音が理解できると発音しやすいのだという。早く喋るようになって欲しい！

4月30日

高木先生から、「最初の十五回（第一クール）の治療がおわり、今日から第二クルールの治療に入ります。これまでの経過は非常によく回復程度も他の患者さんよりも格段に早い。早く右指を動くようにして慈恵医大の磁気治療にかけられるよう頑張りましょう」との話があつた。

5月4日

哲也が手紙などの挨拶文の本が欲しいというので歩いて十五分ほどの蔦屋に一緒に行き買ってきた。手紙を書く意欲が湧いてきたのか？

5月5日

哲也が食卓で右腕を伸ばし、親指が動いたという。聞けば昨日の初台のリハビリの際にはじめて右手の親指が動いた由。三指が動けば慈恵医大に申し込みが出来る。年末くらいを目標にしようと高木先生。

5月7日

高木先生が足の親指の拘縮度合いが減って指がまっすぐになってきた、歩くにも安定するし良い兆候だと。右手の指も柔らかくなってきて中指の先端以外は拘縮度が少ないと。針によって肩や前腕部の大型の筋肉が柔らかくなり動かせるので筋肉が付いて来ている。これまでとは違い、手足の内側に針を打つので哲也は痛がっている。

痛いというよりはむしろ響くのだそうだ。頭部や眉間、鼻の下、顎への打針は他の筋肉傷害の患者にはやらず、哲也のような脳障害者のみに打つという。脳の神経系統が早くつながるといい。

5月14日

初台病院での発音練習に立会う。「ア」行の発音は良くできるようになった。絵を見て漢字、ひらがなを書き、発音する宿題の内容も充実してきた。

初台への通院は非常に安定してきて、一緒に歩いてもそんなに緊張しなくても良くなった。ただ道路の少しの突起でも注意しないとつまずくことがある。

5月15日

コスモス針灸院で、針を打つ準備のアルコールで頭部や腕を拭いているだけで条件反射的に手足の拘縮が緩和され指先が柔らかくなった。いつも胸にピツタリついたままの右手もかなり上まで上がるようになった。

回復が早くなる兆候とか。慈恵医大への申し込みは八月くらいに早められそのこと。大いに勇気づけられた。

哲也は、電気カミソリのコードの接触が悪かった際、「カミソリ(の)電気(が)切れちゃった」とはじめて文章が言えた。聞いていて嬉しかった。

5月16日

哲也は回復の進歩を実感したらしく、意欲が出て初台の発音テキストで寝床に入ってから練習している。

風呂も他人の手が邪魔になってきた様子である。

自室のある二階にも自由に昇降できるようになった。コスモスで「ハ」行の発音練習をしてほぼ完全に出来た由。

5月22日

コスモスで針をさしたままいつも歌を唄うのだが、高木先生に口笛を吹くようにいわれた。口笛は音が出なかったが哲也は急にサイモン&ガーファnkルの初めて聞くような曲を唸りだした。曲名を聞くと「アイアムアロック」と英語で紙に書いた。

高木先生によると口笛は頬の麻痺が残っていると吹けないそうで、今回は口笛を吹こうとして脳が刺激されて今まで眠っていた記憶が覚めてこの曲が出たのだと思うとのこと。何が刺激になるか判らないが、題名を英語で書けたこと自体も喜ばしい。

体重を三キロ減らすように先生に言われてネットでダイエット食品を購入している。この二週間朝は黒豆入りカレースープ、昼はダイエットビスケットしか食べない。そのせいか便秘気味。体重はその割には減っていない。

5月23日

「どっちでもいいよ」「今日の野球放送は」やらない」「昨日は」負けた」「(ご飯は) いらない」などと少しづつ話せるようになって来た。手足の拘縮麻痺も減少し関節が柔らかくなってきた。手首が柔らかくなると指が動くようになる」と高木先生。今日は一日中二階でPCをいじっている。

5月25日

哲也は初台病院からの帰りがけに介護士の藤井さんに会い、これからなにをと聞かれ「新宿の家に帰る」と答えられた。バスを待っていると「来ないねえ」そして「歩こうか」などと話すことができた。

夜、私の高校のクラスメートで親友の真下君が脳梗塞で入院と知らされた。それを教えてくれた三浦君も6年前に梗塞があった由。右手足が麻痺したが、揉んでいるうちに足の親指が熱くなりその感じが上まで上がってきた。腕も揉んだら感覚が戻ってきたという。各人いろいろと苦労している。

5月26日

コスモスで口笛を吹くと哲也はまた違うメロディを思い出した。曲の名前は出なかったが、「J」の字を書いたので高木先生がビリー・ジョエルだと気が付いた。帰宅後ネットで調べるとストレンジジャーという曲で前奏に口笛が入っていた。

5月29日

口笛は顔面の筋肉の麻痺が消えないと旨く吹けない由。それでも哲也は「花」の曲を吹いたと高木先生。

右足の拘縮はだいぶ減り正常の足の形に近づいてきた。右手の各指も拘縮が減り柔らかくなった。偶然かも知れないが、手首を少しまわすことができた。

6月5日

コスモス針灸院で食事の話になった。哲也はカレーを食べているが、何て言うカレーか高木先生も私も名前がわからず、遂に哲也が焦れて泣き出してしまった。ダイエツトカレーの「ハバネロカレー」の発音ができなかったのだ。「ハハロ」とカタカナを書いたがメーカーの名前がはじめてなので周囲は判からなかったのだ。

足の親指がまっすぐ立てるようになり、手首も少し回るようになった。手の

親指の付け根に太い針を刺したとき哲也は「イタイ」といつて反射的に右手を胸の前に動かした。各指の拘縮も少なくなり、針をさした途端に指が柔らかくなる。

哲也の治るスピードは通常人の三倍速いそうだ。先生が秋には旅行に行けるわよ、どこに行きたい？と聞くと「温泉」と答えていた。

針灸院の建物の出口に向かう廊下で哲也は気分がいいのか急に「六甲おろし」を歌いだした。親父の私も一緒に歌っているうちに涙が出てきた。

半分嬉しい、半分情けない涙が…。

哲也は毎晩一時間くらい五十音図を前に発音練習している。「サ」「タ」「ラ」のような口中で舌を動かす歯音、歯茎音の発音が難しいようだ。幼児でも発音できるのに、いい年をして懸命に努力する姿は本当にいじらしい。「マ」「パ」「バ」のような口唇音は簡単に発音できるのに、「カ」「ガ」などの軟口蓋音や、「シャ」「チャ」などの歯茎硬口蓋音は脳が回復するのを待つしか方法がないのか？

6月7日

哲也は注文をしていたサングラス付の眼鏡を雨の中眼鏡屋まで取りに行った。傘を持つと杖が使えないが無理して片道十五分ほど歩いた。その結果、風邪気味の体調になった。

6月12日

ひらがなが難しい。絵を見て漢字は良く書けるのだが。表音文字と表記文字の違いが明確だ。哲也は勉強しても思うようにひらがなが書けない。外人がひらがなは難しいというのは理解できる。この夜、哲也は布団の中で泣いているようだった。いい年をして不憫だ。

コスモスでの針治療でこれまでは右手の親指と小指の先端の拘縮がとれ柔らかくなっていたが、今日は薬指の拘縮がとれて柔らかくなっていた。

阪神の応援扇子を持たせると、家から赤羽の針灸院まで落とさずに持って行くことができた。右手の小指と薬指に感覚が戻ってきたからだと言おう。人差し指と中指は未だ第一関節が硬く伸ばすことが出来ないがこれも時間の問題だそうだ。

これまでなかったことだが左足のつま先を縮めると右足のつま先が連動して縮まる。左足のつま先を動かす神経が脳を通して右足のつま先の神経に繋

がったのか？ 動作を繰り返しているうちに右手の指先が縮まるようになるのか最近針を打つとビンビン響くらしく哲也は痛がるケースが増えている。

先生の言。「五月からはじめた第二クールはあと三回で終わる。これまでは上々の成績だ。これからは右手の指を動かすことに目的を定めて治療し、哲也が発症した八月七日には慈恵医大の安保先生の磁気治療を受けられる状態をつくり上げたい。本来は年末を目標にしていたが、哲也の回復は他人の三倍早いので目標を繰り上げたい。初台の主治医にもこの目標を告げたほうがよい」とのこと。高木先生は哲也の発症直後の検査のデータが欲しいと言われた。

6月14日

哲也の起き抜けに右手の指を触らせてもらった。一昨日と同じ状況で人差し指と中指の先端以外は柔らかくなっていった。

6月15日

初台病院からの帰りがけに新宿の京王デパートに寄った。「キンギョ」と哲也が言うので屋上に見に行つた。メダカを買おうとしたが一匹二百五十円。哲也は「タカイナア」といった。花小金井の金魚屋では十四で百円だ。

帰り道で急に歩くスピードが落ちた。足が痛いのではなくスムーズに動かないらしい。心配しながら帰宅した。

6月16日

コスモスで先生が「体調が悪いようだ」といわれた。鼻の頂上が赤く、唇の色が紫がかっている。梅雨入りと同時に軽い風邪を引いて体全体に調子が悪いらしい。針を打っている間にやや回復して顔色も平常に戻った。早めに帰って静養することにする。

哲也が往復の道中二、三回躓いたので、驚いて彼の腕を掴んだらなんでもないので、といった調子で文句を言われた。こちらはいつ転ぶか判からないので始終緊張して構えているのでとても草臥れる。心配して腕を掴むたびに睨まれるのは叶わない。

病人相手に腹をたてても仕方ないが、新聞などでよく見る、介護疲れから近親殺人にいたる過程がわかるような気がする。

私だつて老後で元気なうちに好きな外国旅行にも行きたいが、こんな病人に付き合わされてはやりきれない。週に四回も付き添いで、その度に転びはせぬ

かハラハラするのは神経が疲れる。自分の子供だから仕方ないのかも？

6月18日～29日

哲也の調子も治り、通常通り初台に通う。

途中一度だけ躓いて膝をついたが、外傷は無い。

母親が安心して哲也を置いて大阪での大学の同窓会に出かけられた。たまには病人のことを忘れて友人とお喋りしたい気持ちが判るよ。

初台からの帰途、新宿西口のユニクロに寄り、Tシャツを買ったり、母親と京王デパートに金魚の水草を買いにいたり、少しずつ外部にも関心が向くようになってきた。

相変わらずヤフーでダイエット食品を買い、夕食に飲むビールをケースで取り寄せたりしている。

7月9日

その後体調も直りどうやら梅雨に伴う体調不良を乗り越えたようだ。

東京セントラルの原川さんがお見舞いに見えた。「ずいぶんスマートになった」といわれて哲也は満足そうにしていた。

初台の診断担当医が石原院長に交代した。慈恵医大の磁気治療を受けたいから時期が来たら紹介状を書いてくれと要請した。先生からは肩の上げ下げと右ひざの上げ下げを練習するようにアドバイスを貰った。初台の言語調整士からテープでの発音のチェックをすると連絡があった。

7月16日

最近、風呂はひとりで自由に出入りできるので大分楽になった。ここところTVでスターウォーズのシリーズを連続で放映し、哲也はそれにのめり込んでいる。

7月20日

哲也は初台の帰りがけに中野坂上の本屋に立ち寄りコンピューター関連の本を物色していた。やっと旧来の仕事に興味が湧いてきたのか？

東京医業保険組合から高額医療費の提出した書類が返送されてきた。東京都の医療費助成を受けているため該当しないとのこと。

一方、東京都からは心身障害者医療費助成制度による高額医療費支給通知書

が送られてきた。これは病院からの通知で自動的に金額が決定され給付される由。毎月一万二千円以上の費用が給付される。

組合からは「東京都より医療費助成を受けているため高額医療費や一部負担還元金には該当しません」とあるが、医業保険組合は、なんで該当しないかわからない由。組合ごとの規則があるらしい。組合に電話すると高額とは四万四千元以上の場合を指し、組合では高額とは認められないとのこと。

都からの助成の有無とは関係ないらしい。どうにも分からない。説明が雑すぎる。

7月24日

赤羽の高木先生の針治療が終わった時、哲也が急にベッドの上で正座をして見せた。膝と足首が柔軟にならないと正座は無理である。本人も出来たのが嬉しいらしく痛いのを我慢してやって見せたのだろう。その後帰宅してからも何回か正座して見せてくれた。

東京セントラルの原川さんからメールで健康保険組合からの傷病手当金は支給開始後一年半でおわるとのこと。当方からは会社には休職期間を一年半に伸ばしてくれるよう要請した。

7月30日

初台の石原院長と面談。七月半ばに院内会議があった由。哲也は回復の状況が明白で本人も意欲がある。次の三ヶ月は従来通りの方針でゆくので週二回の通院は大変だけど頑張ってくれ。下肢部は膝の屈伸を中心に足指をもっと伸ばして足裏を平地に安定させること。上腕部はもっと動けるように。言語は本人は積極的に喋ろうとしているので発音をもっと明瞭にすること。

同時にソシアルワーカーの細野さんから、社会復帰に向けてどのような訓練が必要か話し合いたいとの提案。手始めに初台失語症友の会の入会を勧められた。

また、会社とも話し合って復帰後どのような作業をやればよいかかわかれば、それにしたがって初台で訓練できるとのこと。大企業でも身障者の採用には熱心で、普通の人よりも就職は容易の由。八王子まで通わなくても働く口はあるかも知れない。

7月31日

下肢の装具のかかと部分がまた磨耗してきた。初台の物理療法士の柴田さんから今後の方針を教えてもらった。それによると歩行量が増えたので、外出用と家内用の装具を分ける。前者は頑丈に、後者は透明の硬質プラスチック製である。費用は両方で十六万円ぐらいだが身障者割引で負担は10%とのこと。有難いことだ。

8月4日

コスモス医院で、第二クールの治療は終わる。正座が出来ることが判ったので、下肢が安定してきたことがわかる。これからはうつ伏せになって脳から脊髄、背骨、腰、ふくらはぎに針を打つ治療を始める。治療用の狭いベッドの上でうつ伏せになる練習をやる。右手がまだ利かないので左手を下にして回転するほうが良い。

8月7日

一年前のこの日哲也は倒れた。爾来我々家族の生活は一変した。それでも家族は結束して哲也の回復を信じ、夫々の欲望を抑えて出来る限りの看病をした。

哲也本人も不意の右半身麻痺と失語症に襲われながらも、自暴自棄にならず、我慢強く泣き言を言わず、ひたすらリハビリを続けた。その結果、杖を頼りではあるがどうか歩行が可能になり、週に四日のリハビリと針治療に一度の休みもとらずに通うことが出来た。

「みんな良く頑張った。これからもこの調子でゆこう」と夕食のときに家族に話をしようと思っていた。

この日は異常に暑く赤羽に行く道中哲也は辛そうだった。家からバス停までの間にチョット躓いた。額の大粒の汗が頬を伝って首筋まで流れる中を黙々と歩いた。赤羽駅前の花壇の縁で、まっすぐに出せないので少し横に出して歩く。右足の先を引っ掛けて哲也がよろめいた。私はそのたびに心臓がドキッとしながら哲也の右腕を掴む。右手が利かないのでもし本人が右に転んだ場合は頭を舗道に打ちつける危険があるからだ。

本人は自分でなんとか立ち直る自信があるところに、やにわに右腕を捕まれてカッとしたらしい。物凄い目つきで私を睨み早口でなんか言ったが、発音が悪くて聴きとれない。もう一度聴こうと顔を寄せた。「帰る」といつている。

赤羽の針灸院はあと七、八分のところまで来ているのに。何を言っているの

だと哲也の顔を見て驚いた。

いつもの温和な顔つきと違い、額は汗まみれの上、目が釣り上がり、口を裂けるように開けて、私を睨んでいる。

「君が倒れると思って腕を挿んだのじゃないか！ 君がよろめくたびにお父さんは心臓が締め付けられるように心配なんだ。ここまで来て帰ることはないよ。予約をしている先生にも悪いから」と宥めて再び歩き出した。

「こちらだってこの暑い中に週に四回も好きで付き添って来ている訳ではない。せめて体が動くうちにと、前から計画していた好きな旅行を我慢して、お前の回復のために時間を浪費しているんだ」と日頃思っていることを正直にしやべり、罵倒してやりたかったが、路上で病人相手に喧嘩をしても始まらない。

お互いに黙り込んで針灸院まで来た。針灸院のドアの前に緑色の泥ぬぐい用のマットが敷いてある。今日に限って哲也はマットの下に悪いほうの右足を突っ込んでしまった。転倒しないように大慌てで彼の腕を挿んだ。

その時の哲也の表情は今でも忘れられない。まるで悪魔の顔だ。そしてまたここまで来て「帰る」という。こちらを憎らしくてたまらない様子で、まるで何か取り付いたような表情でこちらを睨んでいる。

先ほどのこともあり私も頭にきて正直、哲也の頬をぶん殴ろうかと思った。それとも「じゃあ一人で帰れ」と言おうかとも思った。その時先生が「いらっしやい」とドアを開けてくれたのでその場は収まった。

癩に触って、癩にさわってその日の帰り道は勿論、帰宅してからも一口も利かなかつた。三日間は顔を見るのも嫌だった。

発症後の一年目の記念日はこうして不愉快なまま終わった。(122145字)